

〔そのとき、〕重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。-マルコ1章-

神さまの好み

おやつを前に、好きなものから食べる子、後にまわす子、あなたはどちらでしょう？

若い頃、母からよく言われました。「お前なあ、仕事は今やりなさい。罪は明日にのばして！」と。私の言葉に翻訳すると「やるべきことは今やりなさい。あなたの『欲望』は明日にまわして」。欲望が悪いと言っているわけではありません。

人が、いわゆる目先の利益を優先するのは「苦痛」を避けたい深層心理が、あるようです。苦痛の先には最も避けたい「死」がちらつくからでしょうか。豊かさが手に取れるようになった昨今、死よりも「老い」を恐れる風潮が見られるのも、老いに伴う不自由、苦痛を予知して、苦しみを回避したい構えなのかもしれません。

私は、好きなものは後にまわす子でした。最後を幸せにしたいからです。大人になって、神さまのことを真剣に学ぶようになって、私のこの好みは「神さまの好み」に通じていると気が付きました。

神さまは、私たちを苦しい試練に合わせて楽しんでおられる方ではない。私を創造されたのは、最終的に私を幸せにするためであること。何でもお出来になる神さまが、私に降りかかる苦しみを癒さないで手を置いておられるなら、何か意味があること。それは、神さまが私のために準備しておられる幸せに私が到達する前に、私にその苦しみを体験してほしいと思われたからであること。最後に幸せを用意しておられる「神さまの好み」です。

そうであれば“嫌なお人の親切よりも、好いたお方の無理がいい”のです。幸せのようなもので誘うサタンよりも、十字架の向こうから手を招いてくださるイエスさまに私は惹かれます。だから前倒して感謝してその苦しみを「先」にいただきましょう。

人には、避けて通れない苦しみがあることをご存じの神さまは、人の弱さに同情し、憐れんでくださるお方です。信仰者の克服しがたい苦しみは特に放置なさいません。

私たちにとって、本当の苦しみとは、ホームレス、寝たきり、障害者であることではなく、大切にされて活かされる命（＝命の原理）が、人の愛から切り離される苦しみなのです。価値のないものとして愛されないこと、私が私でいることが許されない苦しみのことです。主イエスは、この苦しみには、「魂を癒す愛」を保証してくださる神なのです。

